

組織の概要 (企業用)

会社名 株式会社 栗 林

所在地	〒933 - 0113 富山県高岡市伏木 1 - 1 - 1 日本製紙株式会社伏木工場内 TEL: (0766)44 - 0524 FAX: (0766)44 - 0015 E-mail: kbi@themis.ocn.ne.jp		
ホームページ	http://www.kuri-bayashi.com		
設立年月	1943 年 12 月		
代表者	栗林 印吉	担当者	栗林 美紀, 杉森 一博
資本金	1,000万円	従業員数	52名
沿 革	1943 年 12 月 栗林組を創立 主として日本重化学殿の原材料運搬、土木建設請負及び木材業を営む 1945 年 12 月 現日本製紙株式会社伏木工場殿のパルプ原木、一般用材、その他の諸資材運搬を行う 1994 年 11 月 資本金 1,000 万円 商号を「株式会社栗林」に変更 1998 年 8 月 国際環境規格『ISO14001』認証取得 1999 年 ~ 平均年齢 54 歳の社員一丸でコンサルタントに頼らず取得 環境に関して、紙パルプ業界動向と電子ペーパーなど先端技術との比較についてアメリカ人大学講師との定期勉強会開催 2003 年 1 月 紙製造工程でのリユース活用、環境教育も兼ねた紙製品の企画販売の新事業部門発足		
事業概要	日本製紙株式会社伏木工場構内における、製紙原料運搬・製品管理・原料仕込管理・品質管理 紙製品の加工企画		
環境に関する活動実績	1999 ~ 2000 年 富山県新総合計画環境政策研究会委員 2000 年 ~ 環境問題とやま懇話会会員 2001 年 5 月 非鉄金属リサイクル全国連合会にて基調講演 2001 年 7 月 高岡市立志貴野中学校にて総合学習を受け持つ テーマ『地球の環境に関する課題』 2001 年 12 月 たかおかマイバック運動を進める市民の会主催 環境シンポジウムにパネリストとして出席 2002 年 2 月 『学生が考える明日の公共交通フォーラム』出席 2002 年 3 月 公共交通利用拡大フォーラム 『公共交通でにぎやしー街に』パネリストとして出席 2002 年 9 月 スウェーデン・アノト社にて電子ペーパー視察 2003 年 3 月 富山県民生涯学習カレッジにて講座を受け持つ 『これからの時代 消費者は何を求めるか』 2004 年 6 月 米国・フィラデルフィアの図書館にて、生涯学習、全市民で取り組んだ読書啓蒙活動、大活字本について視察 ワシントン・The Center for Association Leadership にてリーダー教育の現状視察、The E Gov Institute 会議出席 カナダ・トロント市役所視察 2004 年 10 月 日仏景観会議出席 「公共交通とまちづくり」 「フランスの都市行政と景観デザイン」		

売上高 (15 年度) 3 億 4 千 7 百万円

政策のテーマ 路面電車を利用し、環境情報を収集、地域も再発見！ルートづくり

- 政策の分野
 - ・ 地球温暖化の防止
 - ・ 社会経済のグリーン化
- 政策の手段
 - 地域活性化と雇用
 - 環境教育・学習の推進

団体名： 株式会社 栗林

担当者名： 栗林 美紀、杉森 一博

政策の目的

地域社会において、人々が安心して暮らせる環境、環境について学び続けることができる体制、地域に関わることによって、地域貢献できるという社会的意義の充足を満たしながら、高齢化社会にスムーズに移行し、環境保全の持続可能な社会を築いていく。

公共交通利用、環境教育、環境保全活動に対して積極的に取り組み、相互の連携も高めながら、より良い地域社会の発展を目指す。

背景および現状の問題点

地域住民が環境問題、高齢化社会、産業低迷に漠然とした不安を抱いている。

- ・ 地方都市においては、家族1人に車1台という社会現象まで生み、高齢者ドライバー、高齢歩行者による接触事故が増加してきている。
- ・ 住居から徒歩圏内にあった食料品店、雑貨店、本屋などがここ数年でなくなり、日常生活が不便になってきた。地域への帰属意識も薄らいでくる。

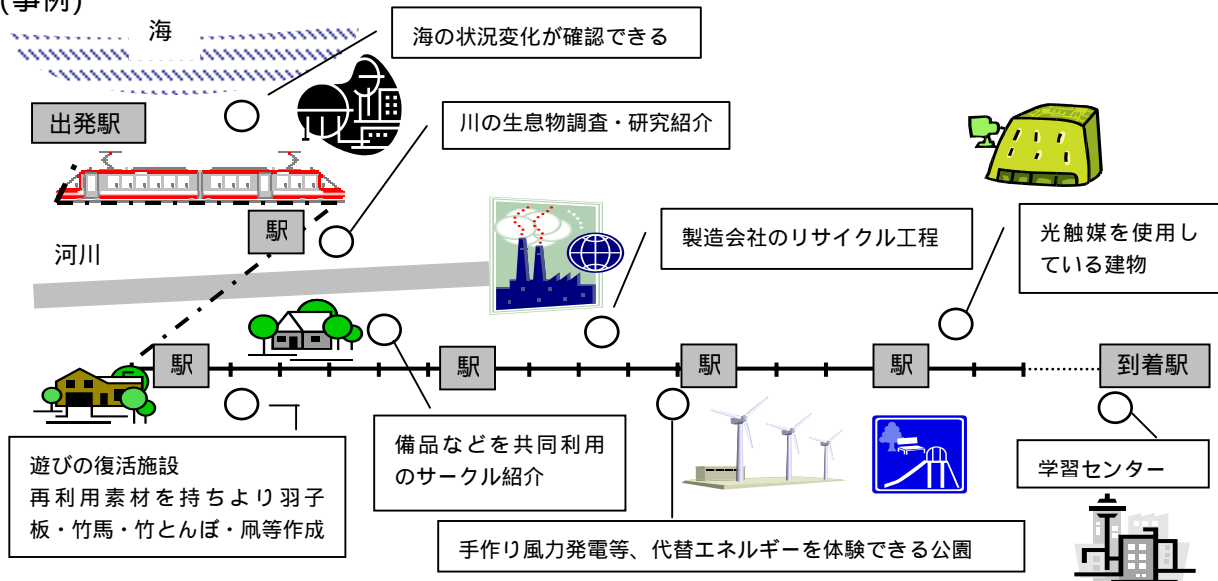
そこで地域社会の一員として、このような問題解決に具体的にどのように関わっていけばよいのか指針を明確に出し、街の未来が描けるようにする必要がある。その方策として、公共交通利用により、環境、福祉に関する意義を知り、利用意識を高めることを実施する。

政策の概要

路面電車を利用しエコスポ()を見学。「公共交通を知る」「環境への取り組みについて知る」「地域を知る」などのテーマで見学コースを作成し、地域住民に対し参加を促す。また、環境教育との連携を深め、環境保全への意識向上を図る。

エコスポ...eco-spot。路面電車沿線に既存する企業、団体などの中で、環境保全活動に積極的に取り組んでいる箇所について見学できるように整備した場所。

(事例)



政策の実施方法と全体の仕組み（必要に応じてフローチャートを用いてください）

公共交通利用（まずは、路面電車）と環境教育を連動させて行い、その成果が更なる環境保全活動、地域環境改善に向かっていくよう推進する。

1．エコスポトレイン推進委員会を設立

路面電車の利用調査、情報収集

企業等にエコスポ見学施設としての協力を依頼

エコスポ見学施設の環境整備

見学ルートの選定

路面電車利用拡大キャンペーンの実施

例「路面電車に乗って、エコスポ拝見！ まち再発見！！」

環境シンポジウム、フォーラム開催

エコスポデーの設定、エコスポラリーへの市民参加、各認定証の発行

2．環境教育の実施

エコスポでの環境への取り組み事例の紹介、解説

学習センター、教育機関において、誰でも利用可能な環境学習コースを設置

「地球白書」「代替エネルギー」「暮らしの省エネ」「ゴミの行方」

「原料調達からの製造工程全般における環境負荷」など

大学、各種専門機関において、社会人向け環境の専門講座の設置

内外の専門家を交えた研究会、講演会、国際会議の開催

3．環境保全活動の広がり

エコスポ見学施設の改善整備と新規エコスポ見学施設の選定。

他企業への波及効果、環境技術等の情報交換の推進。

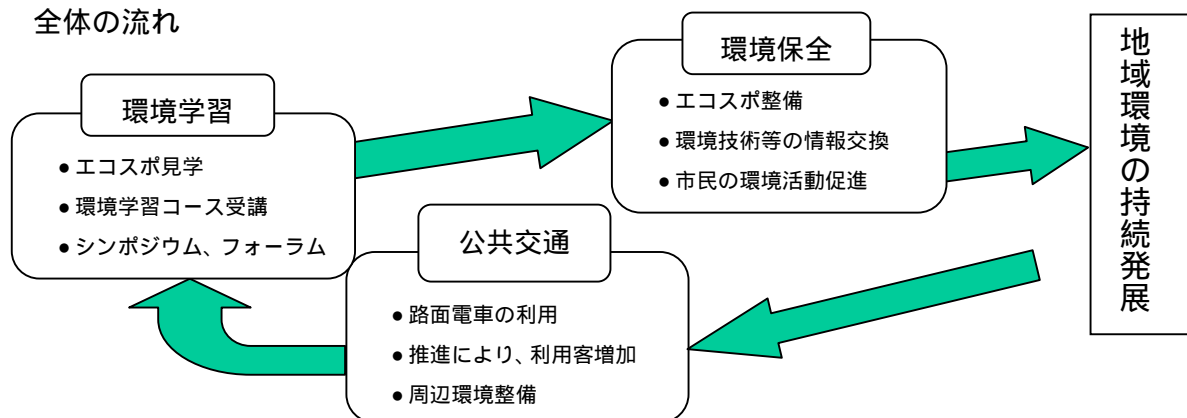
見学施設への利用者増加を働きかけ、住民全体の意識向上、環境活動への促進を図る。

4．地域環境の持続発展

住民、地域、企業などが主体性を持ち、環境保全活動に更なる改善提案を押し進めていけるようサポートする。

なお、全体の仕組みのヒヤリング、監査等は、エコスポトレイン推進委員会と第三者機関が行い、結果を踏まえて是正も進めていく。

全体の流れ



政策の実施主体（提携・協力主体があればお書きください）

実施主体 地方自治体において設置する「エコスポトレイン推進委員会」

委員は、公共交通推進団体、教育機関、建築士会、環境団体、福祉専門家などから選出

協力主体 大学、研究機関、専門家 → 環境学習指導

第三者機関（経済研究所、民間機関）→ 政策の運用を定期監査

環境省、国土交通省、経済産業省 → 情報提供、支援補助、国際会議招聘

提携 商工会議所、地域連合会 → 利用拡大キャンペーンの啓蒙活動

政策の実施により期待される効果

路面電車利用がもたらすもの

一度にたくさんの人を街に運ぶことができるため、自動車と比較して環境負荷が低い。地球温暖化防止にも寄与できる。

近年導入が進んでいる LRT は、高齢者、車椅子、ベビーカー、幼児などもスムーズな乗降が可能なため、人々の可動範囲が街にまで及びやすくなり、新たな経済効果が生まれると見込まれる。また、環境に配慮され、使いやすい LRT は、この先欠くことのできないバリアフリー設計やユニバーサルデザインについて、より人々の関心を誘うきっかけになると考えられる。

地域の実態を観察するなかで、歩道、段差、交通システムについても、考える機会となる。（もっと利用しやすい工夫等の提案に繋がる。）

高齢者社会において、より住みやすい、生活しやすい整備を進めていく必要性を感じる。

エコスポ選定&見学

エコスポ側 見学者が訪れることで、PR、意見交換ができる。

更に他企業、研究機関からの協力、参加も受け入れ、エコスポの普及、発展を図る。環境への最先端の技術の取り組みも推進していく。

見学者側 地域の人々が積極的に環境活動に取り組んでいる姿勢を見て、地域への愛着が深まる。また、様々な環境活動を知ることにより、地域住民が自己の選択、行動に広がりを持つようになる。

継続する環境学習

環境情報収集、環境学習を通して、更なる学習、社会参加への意欲が増す。

また、関連して福祉、高齢化社会についても考え、地域住民としての成長が望める。

街づくり参加増加

環境への意識が高まるにつれ、様々なフォーラム、交流会等に参加する機会も増え、自分も街づくりに関わっていききたいという欲求も高まり、街づくりの活性化にも繋がる。

地域産業への波及

他県、海外からの見学により、観光産業、地場特産物の発展が望める。

その他・特記事項

地域住民の意識改革への試み

1. 車から公共交通への選択

地方都市において「公共交通を使って、街をにぎやかにしよう」と呼びかけても、環境意識の高い人は主旨を理解し協力するが、一般的には「なぜドアツードアの便利な生活をやめて、待ち時間が長く(寒く)、時間もかかり、更に他所に寄るにも面倒な移動手段をあえて選択する必要があるのか。」という人々の意識を納得させて変えることは容易ではない。

そこで見方を変え、テーマパークをゆっくり走るトロリーのような感覚で、街の環境散策として捉えてみる。散策としての路面電車利用は、普段気づかない地域の様々な形態を見せてくれるとともに、いろいろなことを見直すきっかけとなるであろう。

2. 高齢福祉社会への着目

- ・ 高齢知覚体験講座を併設 — ずっと車を運転して、好きな時に好きな所に行きたいという人々の運動知覚感覚は、高齢になると衰えてくるという現実を疑似体験する。
- ・ 高齢者の意識調査開示 — 高齢者になり、疎外感を感じることも増える中で、地域と関わっていたい、人々の役に立ちたいという意識は次第に高まってくる。
- ・ 高齢者の活用 — エコスポの管理運営には、高齢者を雇用する体制も整える。

地域の継続的發展

1. 互いに連携を図りながら、路面電車から更にコミュニティバスなどへと、エコスポの拠点作りならびにゾーンを広げていく。
2. 小学生、主婦、高齢者も参加しやすい環境を整える。
3. 環境、福祉に関しては、ヨーロッパの先進地域を参考にすることが多いが、アジア地域においてリーダーシップをとり、情報交換、相互視察を行い、より良い選択をするよう、交流を積極的に進めていく。

